

雑 談

浅 田 敏 (地球物理)

この35年は実に長かった。あと又35年生きるとすると95歳になるわけである。95歳まで生きる心配はなさそうだが、小生はもともと楽観的なたちなので若しかしたらそれまで生きるかもしれない。この数年間の時間のながれは予想に反してのろかった。一体あと35年を退屈しないで暮して行くには何をしたらよいのだろうか。

あまりつまらないことを考えないで、年々みに昔のことを思い出して見よう。筆者の人生にとって最初の一大事は旧制高校のときに結核にかかったことである。学校では落第しない最小限の日数しか出席しなかった。

この病気は18歳のときに始まって大学卒業位までつづいた。なんともいえない程つらい生活であったけれど、当時、ことに旧制高校時代には今日では考えられないほどの大量の本を読んだ。思い出して見ると若々しいのしさに満ちていたような気もする。

そのころ結核にかかった若い人、我が友人達、はほとんど全部死んでしまった。ところが筆者はどうしたわけか、10人か20人に1人位の割合でしかない生き残りの仲間に入ることに成功した。

大学を出てから2～3年したころ、又この病気が再発し、なおるのに35歳までかかった。この時無事にきりぬけられたのは化学療法が出現していたからである。

さて学問の方のことであるが、ふりかえって考えて見るに大学卒業後10年くらいはあまり大した論文は書いていない。しかし1950年代のおわりに書いた微小地震の存在と性質、ならびにその観測方法についての論文は大成功であった。

このとき用いた *Microearthquake* と云う和製英語は鈴木次郎さん(東北大学教授)とともに考えたのであるが、今日世界中の地震学界に氾濫している。

1970年に第一号型の海底地震計を作った。それまで実的に役にたつ海底地震計は殆どなく、観測網は陸上にだけしかなかったので海の底で地震波を観測すると面白いように新しい事実が見つかった。以来10年間我々の地震計は少しずつ新型になり、新しい結果が蓄積しつつある。これから製作される新型もある。

世界中を見わたすと随分ドジな海底地震計を作っているグループもあるので、我々の評判は比較的よい。まだ論文のかたちで発表はされていないが、海洋底では100キロ位の深さにまで異方性が存在するらしいことがわかって来た。今までは数キロ位のごく浅い所のみ異方性がみとめられていたので、深部までの異方性が証明されると中々の大事件になるのではないかとたのしみにしている。

1960年代の10年間には何をしていたか考えて見ると、主として日本における爆破地震動観測の組織づくりと測器の進歩の推進をしていた。むだに時をすごしていたわけではないと自らなぐさめている。

地震学における最大の問題の一つは地震予知であろう。ところが筆者は地震予知の研究は一度もしたことはないし、従って論文を書いたこともない。それにしても予知についての論評文はたくさん書いているし、社会活動も多すぎるようである。研究者としてのバランスはくずれている。地震予知と云うものは不思議なものである。まだ科学にはなっていないのだと思う。

予知研究のためにつかわれる金額はかなりにのぼっている。しかし地震予知研究にも、もしかしたらまだ「穴」がのこっているのではないかと云う気がする。つまり小額の資金とよい考え

さえあれば重要な結果を得ることが出来るかもしれない。もし本当にそうだとすれば、筆者にとってもこれからのたのしみがあると云うものである。35年ぐらいはもつかもしれぬ。